

出征兵士 「住吉の浜」にて送る

吉田町遺族会 松浦太一朗

先の大戦から、戦後76年に成りますが、今でも、極めて悲惨だった小学生時代の、世界第二次大戦の頃が思い出されて、忘れる事はありません。

小学生の頃には誰もが楽しいことが、数限りなく有ることを信じて居ましたが、何一つ叶いませんでした、誠に残念でなりません。

其れにつけて思い出されるのは、母親の苦勞をつぶさに見て来た頃が、忘れようと思っても忘れる事は有りません。

父は遠洋漁業に出ていましたので、家に居る事が少なく、父親の印象は記憶がおぼろで、はっきりとした思い出は多く有りませんが、大戦の初めから終戦、そして戦後と、子供心にも厳しい生活だったと記憶しております。

それよりも尚、母親の苦勞は筆舌に尽くせない苦勞の連続でした。家族の為に寝食を忘れて、父の留守を預かるその苦勞は子供として忘れては成らない記憶の一つです、それと併せて、父の出征の頃が走馬灯の様に私の胸をよぎります。

父親が第二次大戦に出征致したのは私の、小学二年の1月31日でした。

我が家は、先代より漁業に係わって居りましたものですから、軍属の戦闘員として、父親の生まれた海辺から、戦地に向け出征して行きました。

出征兵士達が出征した後で、15・6歳の少年が二人、供に出征しましたのでその二人の少年の事を思うと胸が張り裂けそうになり・・・必ず帰って来るんだと！、何度も子供心に思ったことか、併し、遂に最後まで全員還ることは出来ませんでした・・・そして。

兵士を送るその浜辺には、夕闇が迫り、兵士の家族、又関係者一同、その他大勢の人達で、見送る人、人の波で「住吉」の浜は歓呼の声で埋め尽くされて居りました。

そして、その浜辺で父親を見送ったのが最後で、今生の別れと成ってしまいました。

その当時の浜辺の様子だけは76年経った今でも、私の瞼の底から離れる事は有りません、そして歓呼の声が響く中、本船は少し沖合いで錨をおろして居りましたが、兵士達が小舟に乗り込もうとした時、波打ち際に少し大きな「亀」が磯に上がろうとして居りました、それを見た見送りの人達も可愛らしさも有ってか、海辺が賑やかになり、兵士を送ることを束の間忘れかけて居りましたが・・・それが出征した兵士達との最後でした。

思い起こせば数限りなく思い出は尽きませんが、現在の今、其の頃を思い出

せば、口には表せない事が無数によみがえってきます。

あるときは、タンスの隅で母親が時々目頭をぬぐって居る時も有りました。其の頃の小学生では自分には何故だか、分からなかったのですが、成長する事によって、どうしてタンスの隅で泣いていたのか？・・・と後で分かったことですが、父親の留守を預かる自分に周囲の目は冷たくて・・・

我が家では成人した男手が無いので、やはり周囲には可成り色々なことで母親は攻められていたのでは無かったかと、今にして、やっと分かりかけております。

今更、過去を悔やんでも致し方無いけれど、戦中、戦後と兵士達が誠を尽くした最大限の大きな心を、今に成っても、必ずや、忘れる事が有っては成らないと心に誓って居るこの頃です。

乱筆乱文でありますが、皆様のお目に留まれば幸いです。